

【論文】

ドストエフスキイにおける子ども

—『カラマーゾフの兄弟』をめぐって

秦野 一宏

<序>

ゴーゴリはかつて、チーチコフ（『死せる魂』）を否応なく金儲けへと走らせる巨大な情熱、そのエネルギーを変換させようと試みた。チーチコフがもし勇士として生まれ変わり、その情熱を有益に用いることができれば、ロシアも彼に倣って生まれ変わるだろうと考えたのだ。ゴーゴリは、「有徳な人物たち」の力を借りてチーチコフを改心させようとしたが、この大なる俗物を説得できるだけの力ある者を描き出すことに失敗し、構想は挫折した。

ドストエフスキイもゴーゴリと同じく、人を衝き動かす狂暴な力に強い関心を持った。「情欲」である。すべての人間から情欲がなくなれば、人類は子孫を断たれ滅亡してしまう。情欲は人間の生命の連なりを生んできた源であり、未来を生み出すために必要不可欠な力である。ドストエフスキイはこの力を最大にして、それをフョードル・カラマーゾフに与え、遺伝という形で彼の息子たちにも引き継がせた。この情欲を根源に持つ「地上的な狂暴な力、生のままの力」、すなわち「カラマーゾフ的な力」は、無条件に生を肯定する¹⁾。<倒れた>人間の復活、再生が『カラマーゾフの兄弟』の大きなテーマのひとつであるが、まずもって論理以前に生を肯定しなければ、再生はないと彼は考えたのである。ただ、この力は大局的に見れば種の保存を目的としているとはいえ、個人のレベルでは自己の遺伝子を残したいという「狂暴な」本能として現れる。トルストイは「情欲」のもつ狂暴さが人類への奉仕といった人間の<高尚な>目的を妨げることを警戒して、贅沢な食事や酒の節制あるいは勤労によってその欲望を抑えこむように呼びかけたが（『クロイツェル・ソナタ』跋）、彼が危惧するのも

もつともなことだ。実際、フョードル・カラマーゾフに露骨に示されているように、「カラマーゾフ的な力」は鉄面皮に生きる力、他を顧みることなく自分を押し出そうとする醜悪なくエゴイズム>と繋がっているのだから。またこの力は、人を再生させるエネルギーを供給するだけで、再生そのものを促すものではない。

そこで、ドストエフスキイはもう一つの力に着目する。それが<子どもの力>である。現実の中で真の「有徳な人物」を探し出すことはきわめて難しいが、子どもならば無数にいる。また、程度の差はあれ、<子どもの心>であれば誰もが持っている。たとえ失いかけていたとしても、それを取り戻すことは不可能なことではない。

<子どもの力>を信じよ、—これこそ『カラマーゾフの兄弟』を通してドストエフスキイが伝えたかった最も大切なメッセージであった。

1.

<子ども>という鍵概念^キを用いて『カラマーゾフの兄弟』という作品世界を眺めれば、この世界を照らし出す光源となっているのはおそらくは、ゾシマ長老の次の言葉である。「……ことに子どもたちを愛しなさい。なんとなれば、子どもたちは〔動物と同じで〕天使のように罪なきものであるわけだし、我々を感動させるため、我々の心を浄化するために、また何か我々への指図 *указание* のようなものとして、この世に生を受けているのだから²⁾」。子ども時代は大人になるための単なる準備期間ではないと強調したのはルソーであるが、ここではもう子ども時代が独自のものであるという理解を超えて、子どもの姿そのものが、人間の理想形となっている。ルソーもまた「子どもを愛するがいい」と勧めているが、この言葉は子どもを教育するための心構えを示したもので、その意味するところは、好意をもって子どもを見守ろうという呼びかけにとどまる³⁾。一方、ドストエフスキイにあっては、子どもを愛することが、そのまま人間を愛することにつながっていて、子どもの姿そのものが大人への教えとなる。

しかし現実においては、その教えとなるはずの子どもの多くが、早い時期から悲惨な現実⁴⁾に押しつぶされそうになっている。子どもを理想形とし

て指し示したゾシマ長老自身も、工場の劣悪な環境で働く年端も行かない子どもたちに触れて、彼らはやせ細って弱々しく、背が曲がって、「すでに悪徳に染まっている」と嘆いている。

この種の<不幸な>子どもは『作家の日記』のあちらこちらに登場する。子どもに強い関心を抱くドストエフスキイは、物乞いをする少年を取り上げてその実態を細かく描写したり、年少犯罪者が集められた感化院の内情を紹介したり、父親が子どもを虐待した事件の裁判について論争的に自身の考えを展開したりして、虐げられた子どもの救済を訴えつづけている。その中でも1877年の7-8月号に書かれた「偶然の家族」についての記述は、カラマーゾフの「家族」と重なる部分があつてとりわけ興味深い⁴⁾。

「偶然の家族」とは、ドストエフスキイによれば、父親が自分の家族に対して「普遍的理念」をまったく持たないことから生まれるもので、「現代」に特徴的な家族であるという。ドストエフスキイがこの問題を考えはじめたのは、「現代の子ども」は自身の幼少期において、生涯担ってゆくべきどのような「神聖なもの」と出会うことができるのかという憂いからであった。もしも「神聖なもの」を何ひとつ体験できなければ結果的に、どんな非道なこと、愚劣なことをしてもかまわない、「すべては許されている」という考えに取りつかれることになりはしないか。『作家の日記』ではこの「すべては許されている」とする「新思想」の例として、父親が8歳ぐらいの息子に平気で煙草を吸わせるなどという「愚劣きわまる振舞い」が挙げられているが、『カラマーゾフの兄弟』では、周知のとおり、「すべては許されている」というのはイワンの思索の結論でもある⁵⁾。イワン自身は哲学的思索の結果、この結論に論証的にたどりついた、あるいはたどりつくと信じようとしているけれども、そこにはどうやら、彼の子ども時代の育ち方が大きく影響している。父フョードルのエゴイスティックな「カラマーゾフ的な力」が、イワンの考えを生み出す淵源になっている。

ミーチャもイワンもアリョーシャも、平気で子どもの養育を放棄し、子どもの存在すら忘れてしまうという破天荒な父のもとに育った。まさに彼らの家族は「普遍的理念」が欠如した「偶然の家族」の典型である。しか

しだからといって、三人がともに「神聖なもの」を持たないわけではない。

ミーチャは父親の家にいた幼年時代、長靴もはかず、ボタンの一つしかない襦袢のズボンをはいて裏庭をかけめぐっていたというが、おそらくその境遇は三人に共通するものであっただろう。ただ、そんな悲惨な状況にあってもミーチャとアリョーシャには忘れられない「懐かしい」思い出がある。ミーチャは4歳の時ゲルシェンシュトゥーベ医師に同情され、一フントのくるみを恵んでもらうという忘れられない体験をした(23年ぶりに故郷に戻ってきた時も、彼はまずゲルシェンシュトゥーベのところにお礼を言いに行った)。またミーチャは、下男グリゴリー老人にも変わることもない感謝の念を抱きつづけていた。老人を杵で殴打するという傷害事件を引き起こすことになりはしたけれども、それはけっして憎悪からではない。老人に対する感謝の念は消えることはないのだ。まるで実の父親のようにあやしてくれたり、たらいでお湯をつかわせてくれたりした幼い日々の記憶は、ミーチャの心に鮮明に残っているのである。アリョーシャは4歳で母と死に別れたが、静かな夏の夕暮れ、母が自分を愛撫していたことを鮮明に記憶していて、今でも「まるで母が自分の前に立ってでもいるかのように」その面影を思い起こすことができた。

ところがイワンには二人が持っているような「聖なる思い出」がない。

イワンはアリョーシャと母親が同じで、しばらくは一緒に暮らしていた。彼は自分が15歳、アリョーシャが11歳の時までのことをすべて事細かく覚えているが、そのような並外れた記憶力を持っていたにもかかわらず、弟のことを「好きだったかどうか」ということになると、記憶は定かではないという。アリョーシャは、自分が誰の世話になっているかということに関してはまるで気遣わずに子ども時代を過ごすことができた。しかし、イワンは知的に早熟だったこともあろうが、10歳ぐらいになると、他人のお情けで暮らしているという苦い思いに付きまとわれることになる。幼くして才能を発揮したイワンは、「天才的な才能をもった少年は天才的な教育者のもとで教育されるべき」だとの後見人の考えもあり、13歳の時から「有名な教育者」のもとでエリート教育を受けることになった。とはいえ後見人の計らいはあくまで当人のモットーにしたがってのもので、イワンは弟

のように手放しで可愛がられていたわけではない。自身の「天才的な」才能を称賛されることはあったにせよ、人から愛情を注がれたという子ども時代の記憶はどうやら、イワンには皆無らしい。こう見てくると、イワンはまさに「偶然の家族」の暗黒面を一手に引き受けた観がある。いわば彼は、父親といっしょに煙草を吸っていた子どものあり得べき暗い、未来の姿なのである。「偶然の家族」の中で育った彼は、子どもの頃に身につけた「すべては許されている」という思想を、自他ともに認めるその優れた知性によって自身の〈哲学〉にまで高めたのである。

もちろん、〈聖なる思い出〉と〈哲学〉の関連は、イワンには隠されたままである。すでに述べたように、彼は自身の〈哲学〉はあくまで論理によって導かれてきたものだとしている、あるいは信じようとしている。しかしその論理も、自分で思っているほど筋道の通ったものではない。

イワンの〈哲学〉の根本にあるのは、罪なき子どもの償われることのない苦しみである。たとえその苦しみが「永遠の調和」をあがなうためにもどうしても必要だとしても、そんな「調和」は断固拒否すると彼は言う。〈子どもに罪はない〉というイデーによる神の世界の批判、ヨブを想わせるこの神への執拗で激烈な批判を撤回しようとするれば、おそらくヨブのように、理性に頼らない「回心」のようなものが必要なのであろう。しかし、イワンの道はヨブの道ではない。彼は神の世界の否定からさらに神そのものの否定に到り、そこから「すべては許されている」という命題を導き出してくるのだ。これはしかし、あたりまえに考えれば、矛盾である。もしすべてが許されているのであれば、子どもに煙草を吸わせてもいいどころでなく、罪のない子どもを殺すことも許されることになるからだ。なぜこんな非論理に陥るのか。それは、ソロヴィヨフの指摘するように、〈子どもに罪はない〉というイデーが、どんな世界の未来像をもってしても取り消せない「直接的な義務」としてイワンに受け入れられていないからだ⁶⁾。彼は、無垢な子どもたちが苦しめられる具体的事実を多く集めているが、この事実から出発して〈神の世界を認めない〉という命題にたどりついたのではない。彼の哲学の真の出発点は、神（あるいは神の創った世界）に対する自身の個人的な憎悪である。彼は自身の憎悪を一般的命題にまとめ

上げたあと、それが真の命題であることを立証するために、さまざまな実例を探し出してきたのである。とすれば、彼の神に対する憎悪は何に由来するのだろう。あがなわれることのない子どもの苦しみにについて多くを語ったあと、イワンは次のように言う。

「ぼくは調和なんてほしくない、人類を愛するからこそほしくないんだ。むしろあがなわれることのない苦しみとともにとどまったほうがいい。あがなわれることのない苦しみ、癒されなかったぼくの怒りを、たとえぼくがまちがっていても、いつまでも抱えていたいんだ⁷⁾」

最初の「あがなわれることのない苦しみ *страдания*」とは、猟犬に引き裂かれたり、八つ裂きにされたりしたたくさんの子どもたちの苦しみのことで、当然、複数形になっているが、それが瞬時に「あがなわれることのない苦しみ *страдание*」という単数形にすり替わる。まるで手品を見ているようだ。子どもが苦しめられたことへの怒りと、自分が苦しめられたことへの怒りが同時に並べられることで、なんだかどちらも人類愛に基づく義憤のように思えてくるから不思議だ。言い換えれば、苦しむ子どもや人類愛は、あたかも隠れ蓑のような役割を担わされている。人類を愛するなど大仰なことを言っているが、彼にとってなにより大事なのは自分自身なのである。父フョードルから受けた仕打ちを含め自分にこれまでなされてきた仕打ち、自分がなめてきた苦勞、他人のパンの苦さを絶対に忘れないというのが彼の本音なのである。ここでは彼の得意の<論理>は用いられない。この世の苦しみがこの世でむくわれないなら、はらいせに、「怒り」だけを持ち続けてゆくほうがましだというのだ。これは論理ではない。

注意したいのは、命まで奪われてしまった子どもの苦しみと違って、イワンの苦しみはまだ、この地上世界で、<ほんの少し>はあがなわれる可能性があるということだ。地下室人タイプの間人ならば、ここで必ずや「権利」を持ち出すだろう。たとえば『おとなしい女』の主人公質屋は、世間から受けた<迫害>に対して、こんなふうに見返りを求めた。「あなたたち

は生涯にわたる侮蔑で答えた。したがって、今やわたしはあなたたちを隔てる壁を作り、3万ルーブルを貯めて、その金でどこかクリミア南海岸あたりの山のぶどう園に自分の領地を買い、そこで余生を終える権利をもっている⁸⁾。地下室人(二重人)たちはみなこのように、自分に都合のいい<論理>に頼る。イワンの隠された<論理>も似たり寄ったりのものだ。ただ、質屋よりもはるかに教養のあるイワンは、自身にだけ関係することで、自分には「権利」があるなどとは言わない⁹⁾。彼が自身の苦しみの代償を引き出すために持ち出すのは「すべては許されている」という言葉に集約される<哲学>である。この<哲学>は、旧来の世界観、道徳観を覆し、地上の世界での幸福と喜びをもたらすことを目的として考え抜かれたものだが、それが普遍的なものであるとすれば、卑俗なことにも適用できることになる。イワンをよく知っているスメルジャコフは言う。イワンがなにより好きなのは、「裕福に落ち着いて暮らすことができ、誰にも頭を下げないですむ」ことだと。もちろん、すべてが許されているのであれば、苦しみをあがなってもらうためにこの俗っぽい望みも叶えられてしかるべきだったのだ。好みの落ち着いた生活をするためにはそれ相応の金がいるが、何をしてもいいなら、人を殺して金を得たってかまやしない。要は捕まらなければいいのだ。イワンはこの<哲学>に則り、半ば無意識的にはあるが、スメルジャコフがフョードルを殺害することを承認した。フランスに移り住むことを夢見ていたスメルジャコフはそれを受け、殺害を実行し、その結果二人はともに、未来の楽しみのための資金を手に入れることができた(スメルジャコフは3千ルーブルを手にし、イワンも多額の遺産を実際に受けとっている)。ただ、二人はともに、論理の外にある自身の良心の咎めを完全に抑えきることはできなかった。

さて、苦しめられる子どもたちへの言及が、イワンの子どもたちに対する愛情を物語るものでないとしたら、彼はいったい子どもというものをどのように見ていたのだろうか。イワン自身は子どもが大好きだと言っているが、この言葉はにわかには信じられない。極度に自意識の強いイワンのような男の隠された感情を知るためには、それなりの工夫、迂回路が必要である。ここでは、子どもを意識せずに語られた彼の「大審問官」物語を、

斜交いから眺めることにする。

大審問官は、キリストを相手に、自分たちは人間から自由の重荷を取り除いて、子どものように「幸福」にしてやるのだと豪語する。が、彼の言う「子どもの幸福」とは、「力の弱い者の幸福」、「いくじない動物としての幸福」と言い換えられるものであった。大審問官には子どもに対する敬意など、微塵もない。ゾシマ長老は、子どもたちに必要なのは「太陽」であり、「子どもらしい遊び」であると語ったが、大審問官が比喩で触れる「子どもたち」の世界には、「遊び」はあっても「太陽」がない。

すでに述べた通り、ゾシマ長老にとっては、子どもは大人に対する「指図」のようなものであった。この「指図」という言葉からも分かるように、ゾシマは子どもを大人の下にではなく、上に見ている。『作家の日記』の中でも、ドストエフスキイは自身の声で、大人は子どもより劣っていると明言している¹⁰⁾。なるほど「知恵 yM」は大人のほうがまさっているが、そうは言っても大人は「聖者」ではない。「聖なるもの」をどちらが多くもっているかということを考えれば、大人は自分を子どもより高しとするわけにはいかないとドストエフスキイは言う¹¹⁾。比喩から見てとれる大審問官の考えは、このゾシマ—ドストエフスキイの考え方に真っ向から対立する。

「わしらは彼ら〔人間たち〕が弱く、哀れな子どもでしかないということ、しかし子どもの幸福こそ何よりも甘いものであることを教えてやるのだ。彼らは臆病になって、わしらを見ては、母鳥に身を寄せる小鳥のように、恐怖に駆られてわしらに身を寄せるようになるだろう。彼らはわしらに驚き、震え上がり、わしらが何千億もの荒れ狂う群れをおとなしくさせることができるほどに力があり、賢明であることを誇らしく思うだろう。わしらの怒りに打ちしおれて、がたがた震え、おじけて知力も失って、その目は女、子どものように涙もろくなるだろう。だがわしらが合図をすると、彼らはいとも簡単に陽気になり、笑いだして、明るく喜んで幸せな子どもの歌に興ずるようになる。むろん、わしらは彼らに労働させる、だがその余暇には、子どもの歌と合唱、無邪気な踊りを与え、彼らの生活を子どもの遊びのようにこしらえてやるのだ¹²⁾」

大審問官に言わせれば、人々が「子どものように」幸福に暮らせる世界は、この世の<楽園>なのだろう。しかし、この楽園の住人たちは、管理する者たちの<善意ゆえに>、ほんとうのことは何も知らされていない。これは、ルソーの<理想的な子ども>エミールの置かれた状況とよく似ている。楽園の住人たちもエミールも、誰かが人為的に作りだした<幻像>によって取り囲まれているのだ¹³⁾。ルソーの善意は少なくとも信じるに足るものであったけれど、大審問官の場合はそれすらおぼつかない。「子どもの遊び」のように生活をこしらえてやると語る時の大審問官の言葉には、なにやら悪意すら感じられる。子どもというのは、バカで何も知らない幼稚な奴らだと彼は考えているのだろう。実際は強制された奴隷状態にあるのだけれど、みんながそのことを知らずに楽しく暮らしているのだからそれでいい、という考えで作られたこの楽園は、知っていれば誰も暮らしたくない「嘘と欺瞞」で塗り固められた巨大な牢獄である¹⁴⁾。すべてを知っている大審問官たちは人々の苦悩を背負い込むのだというが、その顔に浮かんでいるのは驕りだけである。彼らは陰で人々をあざ笑っているのだ。実際、支配者に納まった大審問官たちを「指図」しているのはキリストの「姿 образ」でもなければ、ゾシマ長老の言う「子ども」でもなく、「悪魔」であった¹⁵⁾。

大審問官にあっては、子どもへの軽蔑が人間そのものへの軽蔑と緋い交ぜになっている。観念としての子ども、観念として人間は愛しているのかもしれないが、現実生きる隣人としての子ども、現実生きる隣人として人間を彼は軽蔑している。そしてこの子ども及び人間への愛を装った軽蔑はまた、「作者」たるイワン自身のものであった。「大審問官」の物語を聞いていたアリョーシャは、イワンが自分を大審問官に重ね合わせていることを察知し、胸や頭に「地獄」を抱え、どうして自殺せずに生きていけるのかと問い詰める。イワンの答えは「カラマーゾフ式」にやればいい、というものであった。ここでの「カラマーゾフ式」には、淫蕩におぼれるという意味ともう一つ、「すべては許されている」という意味が含みこまれている。イワンはどうしてもこの<哲学>に頼らざるをえないのだ。

—しかし、この哲学が現実にもたらす醜悪な結果には耐えきれない。かといって、他に何か価値あると思えるものを強く信じきることでもできず、彼の「魂 душа」は宙吊りになる。彼の前に延びているのは発狂への道だけである。

イワンは子どもを軽蔑し、けっして子どもに教わることはなかった。ここが問題なのだ。＜子どもの力＞を授かることができない彼に残されているのは、「カラマーゾフ的な力」に身を任せることだけである。その力を制御し、プラスの方向に活かすことは彼にはできないのである。

2.

ドストエフスキイが子どもに託す強力なイメージは何よりも、＜無垢なる者＞である。このイメージに最もふさわしいのはアリョーシャであるが、面白いことに、「子どものような」という比喩は彼にはほとんど用いられない（あとで触れるような例外はあるが）。あるいはそれは、子どもに向かって、おまえは子どものようだと言わないのと同じことかもしれない。この比喩を必要とし、浴びるように受け取るのは、老商人の囲い者であったという曰くつきの過去をもつグルーシェンカである。

グルーシェンカの評判は芳しいものではない。人を人とは思わないほどに傲慢なところがあり、金にかけては抜け目がなく、けちん坊だという噂もある。どうやらフョードルと組んで、何やらあくどい儲け話にも手を染めていたらしい。彼女の最大の特徴はロシア的な美しさ、何より男を惹きつけるその肉感的な魅力にある。フョードルもミーチャも、ともにその魅力に取り込まれ、彼女なしには夜も日も明けぬありさまになった。まさに「情欲」を掻きたたせる女、「カラマーゾフ的な力」を噴出させる女である。グルーシェンカはアリョーシャに会いたがっていたが、お堅い修道士で、善良そのものだと言われている彼を、からかってやろうという気もあったようだ。ところがこの＜悪女＞、時に「淫売」、「けだもの」と陰口を叩かれる女性も、アリョーシャとの出会いの場面では、無邪気なく子ども＞として現れる。

「アリョーシャをなによりも驚かせたのは、子どものような、無邪気な [простодушное] その表情であった。彼女は子どものように眺め、何かうれしそうなその様子も、いかにも子どもらしかった。そしてそういう『うれしそうな』様子で、それこそ子どもみたいに、じりじりとした好奇心をまるだしにして、何かを待ち受けているかのように、彼女はテーブルのそばにやってきた。彼女のまなざしには心を浮きたたせるものがあり、—アリョーシャもそれを感じとった¹⁶⁾」

アリョーシャが感じた第一印象は、まったく彼の予想に反するものであったが、この子どものようなグルーシェンカこそが、これまで殻に覆われて見えなかった本来のグルーシェンカである。とはいえ、この第一印象はすぐさま訂正される。

アリョーシャはカテリーナの家を訪問して、そこで思いがけず客として招かれていたグルーシェンカと出会った。二人の傍らにはカテリーナがいる。アリョーシャが来る直前までカテリーナは、グルーシェンカをミーチャからうまく引き離そうと、言葉巧みに交渉していたのである。しかしグルーシェンカは、「チョコレート」で釣って負かそうとする相手に、自身のありのままの姿を曝け出しはしない。それどころか、彼女は相手の企みに乗って大芝居を打とうとしていたのである。だからカテリーナの前では、グルーシェンカの口のきき方も甘ったるく、身振りもなよなよとして、なんだか気取っている（「甘ったるさ」の強調は、けっして「好色」を意味するものではない）。グルーシェンカから、ミーチャとは別れるという言葉をとったカテリーナはさらに相手を丸め込もうと、あらん限りほめちぎり、グルーシェンカの手に接吻までしてみせる。一方、相手に合わせて愛想のいいことを言っていたグルーシェンカは、最後に確約を求められると、その態度を豹変させる。さきほどミーチャと別れると約束したかもしれないが、気が変わったと言うのだ。そのあとグルーシェンカは、お詫びにとばかり、うやうやしげに相手の手を取り、接吻するポーズをとる。相手がその気になって手を引っ込めないでいると、彼女はしかけていた接吻を取りやめ、「穴のあくほど相手を見つめて」、あなたは自分の手に接吻した

が、わたしはあなたの手に接吻しなかったということを、ずっと憶えておいてほしいと言ってのける。相手を侮辱するこの「狡猾な」仕打ちを目の当たりにすると、さすがのアリョーシャも第一印象を捨て、「何か恐ろしい女だという観念を作り上げ」てしまった。

アリョーシャがグルーシェンカと再び出会ったのは、ゾシマ長老が亡くなった日である。あたりまえなら、終日、亡き師を偲んで静かに過ごすところだろうが、この日、アリョーシャはグルーシェンカのもとへ行かないかというラキーチンの誘いを断らなかった。それは、ゾシマの遺体から腐臭が漂ったことと関係している。彼は長老の死を悼み、「子どものように泣きはらした顔」になるまで泣きとおしたが、それほどまでに信服していたゾシマが、死んで腐臭を放ち、世間の評価を下げたという事実にとてつもない衝撃を受けたのだ。彼は僧院に残っていたくなかった。

とはいえ、アリョーシャはグルーシェンカに救いを求めていたわけではない。気晴らしというのもあたらない。彼は「墮落」を求めたのである。腐臭があったために、人はゾシマを誹謗中傷する。聖者の死であれば、何かしら奇跡のようなことが起こるかもしれないとさえ期待していたのに、腐臭だなんて、なんのために神はそんなことを許したのか。もう「神の世界」なんか認めない、墮ちるところまで墮ちてやれと、アリョーシャは自暴自棄になっていた。振舞いもこれまでのアリョーシャとはまるで違う。ラキーチン相手に怒鳴りだす、いらだって叫びさえする。ソーセージは食べるし、ウォッカも飲むという。かねてより「アリョーシャの聖者から罪人への墮落」を密かに期待し、アリョーシャを連れてくれば、25ルーブル支払うというグルーシェンカの約束も取り付けていたラキーチンにとっては、まさに時機到来であった。

ラキーチンが墮落を促すと、アリョーシャはそれをすすんで受け入れ、奈落の底に向かって突き進む。グルーシェンカ訪問はまさに、アリョーシャの「カラマーゾフ的な」行動だったのだ。ただイワンと違って、アリョーシャの神に対する不信感は長くは続かない。「恐ろしい」はずのグルーシェンカが結果的にアリョーシャの反逆を止め、「カラマーゾフ的な力」を別方向に向けた。語り手は、腐臭事件がアリョーシャの「理性」をはげ

しく揺さぶっただけでなく、ある目的に向けて彼を、生涯変わることはないほど「決定的に」志向させる機縁になったと言うが、この人生の「一大転機」に大きな役割を果たしたのが、ほかならぬグルーシェンカであった。

カテリーナのいない二度目の対面の時にはもう、グルーシェンカは前回のような甘ったるい口のきき方もしないし、なよなよと妙に気取った身振りも影を潜めていた。恐ろしさも感じさせない。それどころか、第一印象の正しかったことを明かすように、彼女は温かく、楽しげに笑っている。アリョーシャは彼女がこんな「善良な表情」を見せようとは思ってもかけなかった。グルーシェンカは、ラキーチンが望むように、たしかにアリョーシャを誘惑しようとしていたのかもしれないが、今はもう、彼に会えたことを素直に、心から喜んでいるのだ。それだけではない。ゾシマ長老の死を知った時、グルーシェンカは驚き、「うやうやしく」十字を切った。そして、ふと自分がアリョーシャの膝になれなれしく乗っかっていたことに気づくと、まったく思いがけない行動をとった。

「〔グルーシェンカは〕突然びっくりしたかのように体をピンと伸ばしたかと思うと、すぐさま〔アリョーシャの〕膝から飛び降りて、ソファアに座りなおした¹⁷⁾」

じつにけれんのない自然な行為である。アリョーシャは驚いてしばらくの間、彼女を見つめていたが、ふいにその顔がぱっと明るくなった。この行為に顕われた彼女のやさしさ、子どものような純真さが、アリョーシャの「魂 душа」を「立ち直らせた」のである。誰もが悪徳の権化のように言い、自身もその噂を信じて「怖い」女だと思い込んでいた女性が、じつは、自分のことをたいせつに思ってくれる「誠実な姉さん」であった。この認識の大転換は、論理的に考えを積み上げた結果、引き起こされたものではない。アリョーシャは、彼女の一見、不可思議だと思えるような行為の真の意味を一瞬にして悟り、これまでの自分の行動そのものを悔いたのだ。「もし我々〔大人〕が彼ら〔子どもたち〕をよくするために何かを教えているとすれば、彼らもまた、ただもう触れ合うだけで我々に多くのこ

とを教え、我々をよくするのだ¹⁸⁾」と、ドストエフスキイは『作家の日記』(1876年2月)に書き記しているが、アリョーシャもここで、グルーシェンカという<子ども>と「触れ合う」ことで教えられたのである。

多くの者がゾシマの遺体が腐臭を放ったという現象に惑わされ、あれこれと誹謗中傷しているが、その中にあっても自己を信頼しつづけること、そのことをグルーシェンカは教えてくれた。たとえ一人きりになったとしても、みなと同じ人間にはなるなというコーリャ少年へのアリョーシャの忠告も、このグルーシェンカとの触れ合いがなければ生まれなかった。さらに言えば、「変人」は必ずしも特殊でなく、時として、同時代の人々がみな、間違っていることもあるという、一個人と同時代を対比して見せた気宇壮大な「序文」の言葉もおそらくは、この触れ合いによって魂が立ち直ったアリョーシャの毅然とした姿を念頭においたものであった。

子どもの心をもったグルーシェンカと対照的なのが、カテリーナである。グルーシェンカを特徴づけるのが、子どもに見られるような自然な感情の現れ方にあるとすると、カテリーナの感情の現れ方はいかにも不自然、いびつである。ドストエフスキイはその不自然さを「少し破く *надрывать*」の転義で、病的興奮からくる高ぶった感情の不自然な現れを意味する「うわずり *надрыв*」という言葉で表した¹⁹⁾。この「うわずり」は何より、ミーチャへの愛において現れる。

カテリーナが置かれた立場はグルーシェンカとよく似ている。かつてあるポーランド将校に捨てられ、恥辱と貧困のただ中に取り残されたグルーシェンカはその後、すでに触れたように、老商人に金で囲われることになった。カテリーナも、公金横領の罪で告発される寸前の父親を救うため、という名目はありはするが、結局は4千ルーブルという金でミーチャに自身の操を売ろうとしたのである。ただ、グルーシェンカが事実を認め、自分のことを卑しい女だと感じているのに対し、カテリーナはその誇りの高さから、事実を歪め、つねに自分が誠実な女でありつづけていると信じ込もうとする。—自分は心の底から愛したからこそ婚約したのに、ミーチャはその聖なる「約束」を破った。彼の裏切りのおかげで自分は苦しみぬい

たけれども、それは広い心で許してあげてもいい。ただその代わり、自分のことをミーチャは生涯、神とあがめるべきで、そうならば自分もそれに応え、結婚という形式にこだわらず、全生涯を彼のためにささげる。これが、イワンやアリョーシャに、そして何よりも自分自身に信じさせようとしていたカテリーナの愛の〈ストーリー〉であり、「決心」であった。

アリョーシャは、このようなカテリーナのミーチャへの愛はみせかけのもの、「うわずり」から出たものだと結論づけ、カテリーナにそのことを告げたが、そのお返しは淑女らしからぬ悪意を含んだ罵倒であった。筋書き通りでない言葉が返ってくると、彼女は怒りで顔面蒼白になり、あなたは「白痴行者」だと、吐き捨てるのである。グルーシェンカに対しても「天使のような方」「善良でしっかりしていて、高潔な方」と持ち上げていたが、相手が思い通りにならないとなると、とたんに逆上して「淫売め、出ていけ！」と罵倒したり、公衆の面前で首を刎ねてやれなどと、荒っぽいことを言ったりする。美しくやさしい、品性豊かな貴婦人として外面と、時に噴出する感情の発作との落差がきわめて大きいのだ。

罵倒といえば、高度な知性を誇るイワンも、カテリーナに負けていない（「人でなし」、「淫売」、「けだもの」、「二匹の蛇の食い合い」等々）。彼らはそのとてつもない「誇り」ゆえに、つねに自分を高みにおいて、人を見下している。彼らの関心はいつも〈高尚な〉自分自身に向けられていて、ただ単純に、「理由もなく」（「見返り」もなく）人を愛することができない。イワンがカテリーナを愛していると信じ、またカテリーナがイワンを愛していると信じるようになったとしても、その信はつねに揺らぐ。感情はいつも不安定で、相手が苦しんでいる時も、その苦しみを背負いきれない。子どもの心を干からびさせた彼らには、〈触れ合い〉によって相手を高める力もそなわっていない。

子どもの心を持ちつづけているかどうかという観点からすれば、カテリーナとイワン、グルーシェンカとアリョーシャがそれぞれひと括りになる。前者にはすべてを打算でしか考えられないラキーチンや、報酬なしには善行ができないというホフラコワ夫人も加えられるだろう。ホフラコワ夫人

は異様なほど好奇心が旺盛で、一見すると、子どもっぽいところがあるように見えるかもしれないが、彼女の行動にはつねに損得勘定が見え隠れしている。人を遣ってゾシマ長老の死に方を逐一報告させるのも、長老がほんとうに聖者なのかどうか、自分が長老に教え諭されたことがほんとうに正しいのかどうか、その「証明」を期待してのことであった。

後者に加えられるのは、ミーチャ（ドミートリイ）である。

「旦那ときたら、まるで小さな子どもとおんなじだ……。わたらの間ではみな旦那のことをそう思ってまさあ²⁰⁾」

これは、グルーシェンカのあとを追ってモークロエ村へと向かう途中御者のアレクセイがミーチャに言った言葉である。おれは地獄に落ちるだろうかと尋ねたその答えで、引用箇所はさらに、「旦那は怒りっぽいことは怒りっぽいけど、その善良さ [=無邪気さ *простодушие*] に免じて神様は赦してくださいますよ」と続く。グルーシェンカを愛してやまないミーチャもまた、子どものような「無邪気さ」をもっていた。グリゴーリイを殴打した事件で、そのうち追っ手がやってくるだろう。もうおしまいだと自殺を決意し、この世の最後の5時間をグルーシェンカと過ごそうとモークロエにやって来たミーチャであったが、彼女に出会い、酒の入ったグラスを一杯あけると、とたんに彼の顔から悲壮感は消えて、「子どもっぽい」表情が現れた。そのうち、悪いことをしたあとでまた頭をなでられた小犬のように、彼は感謝にあふれた顔つきであたりを眺めまわしていたかと思うと、もう何もかもすっかり忘れてしまったみたいに「子どもらしい微笑」を浮かべている。グルーシェンカといっしょにいることのできる純粋な喜びが、この微笑によって伝わってくる。気取りやで、だらしないところ、粗暴なところもあるが、ミーチャは子どものような邪気のない喜びを味わうことができるのである。

ミーチャはこれまで「情欲」に任せ、放蕩三昧の生活をしてきたかもしれないが、子どもの心を失っていない。だから彼はイワンとは異なり、子どもの「姿」から学ぶことができる。父親殺害の容疑で捕まったミーチャ

は、予審尋問が終って休んでいる時、眠り込んで夢を見る。この夢に登場する「餓鬼^{がきんこ}дите」に教えられて、彼は、これまでとは違った「新しい人間」になろうと一歩を踏み出す。この「餓鬼」の夢は、まさに『カラマーゾフの兄弟』の小説全体を支えるくらいの重みをもつと言っても過言ではない。詳しく見てゆこう。

夢の中で、彼はどこかの曠野を馬車で走っていて、火事で丸焼けになった集落にさしかかった。集落のはずれには焼け出された百姓女たちが、物乞いをするために列を作って立っている。どの女も痩せこけていて、顔の色が茶色っぽい。その女の中の一人は赤ん坊を抱いていたのだが、一滴の乳も出ないらしく、腕の中で赤ん坊は泣き叫んでいる。

「子どもは泣きに泣いて、寒さのためにすっかり紫色になった小さなこぶしを丸めながら、むきだしの小さな両手を差し出している²¹⁾」

このイメージの強烈さは、レヴィナス哲学の「顔」を想起させる。凍えて紫色になった両手を差し出し、泣き叫ぶ子どもも、レヴィナスの他者の「顔」と同じく、見てしまつたらもう、それに対して応答しないではいられないものである²²⁾。夢の中のミーチャも、何かに衝き動かされるように御者に尋ねる。「なんで彼らは泣いているんだ？ なんだって彼らは泣いているんだ？」。御者は「餓鬼でさ。餓鬼が泣いているんでさあ」と答える。ミーチャは御者が子どもと言わず、「餓鬼」と言ったことに胸をつかれたが、さらに「それにしても、この餓鬼はどうして泣いてる？」と問いかける。

泣いている子どもは一人である。にもかかわらず、ミーチャは最初、奇妙なことに「彼ら они」はなぜ泣いているのかと問いかけた。御者は、ミーチャが何人もの泣き声を聞いたと勘違いして、泣いているのは「餓鬼」一人だと答えた。するとしつこくまた同じような質問が返ってきたので、今度は、貧乏のせいだ、焼け出されたせいだと答える。その答えにもミーチャは納得しない。じつはミーチャの「なぜ」という問いかけは最初から、たくさん子ども、あるいはすべての子どもに関わる根源的なことを問題

にしていたのである。さらに言えば、ここでの「餓鬼」は人間すべての置き換えでもある。ミーチャは最後に、矢継ぎ早にこう問いかける。

「どうして焼け出された母親たちが立っているんだ、どうして人々は貧しいんだ、どうして餓鬼は不幸なんだ、どうして曠野は荒れ果てているんだ、どうして彼らは抱き合わないんだ、接吻しないんだ、どうして喜びの歌を歌わないんだ、どうして彼らは黒い不幸のために黒くなってしまったんだ、どうして餓鬼に乳を飲ませてやれないんだ？²³⁾」

生きることは神を賛美し、たとえ汚辱の底に沈もうとも、「喜びの歌」を歌うこと、—これがミーチャの思想であった。自身を「情欲」をもった「虫けら」だとみなすミーチャはこれまで、自分と同じように汚辱に沈む人間のことばかり考えてきた。しかし、ここで彼が見る夢に登場するのは、彼とは異なり、喜びから見放されて「黒く」なってしまった者ばかりだ。これまで、自己の苦しみを中心とした同心円ばかりを描いてきたミーチャだが、ここに至って彼は、中心を異にする別の円を発見したのだ。

このミーチャの夢に出てくる子どもは明らかに、イワンの語った苦しむ子どもたちの姿と対応する。大便を教えなかったために便所に閉じこめられた子どもや、猟犬の足を怪我させたからといって、猟犬をけしかけられ、ずたずたに引き裂かれた子ども、等々。イワンの場合も、子どもの苦悩は「人類一般の苦悩」の一例として挙げられていた。彼はこうした子どもの苦しみをもって神を糾弾したのだが、ただすでに述べたように、イワンにあっては、子どもの苦しみも人類の苦しみも、彼自身の苦しみに収斂してゆくものであった。

実のところ、イワンの「子ども」は神を批判するために用立てられた「コレクション」でしかなく、彼が<苦しむ子ども>をほんとうに思いやっていたわけではない。自身と自身の語る子どもの間には大きな距離がある。イワンと同じような冷たさをもつのがリーザ・ホフラコワだ。彼女は、男の子が両手の指を切り落とされ、壁にはりつけにされているのを目の前で眺めながら、パイナップルの砂糖煮を食べることを「すてき」だと感じる

という。彼女にとって、はりつけにされた男の子の味わう苦しみは、自分とは<無関係な>他人の苦しみでしかなかったわけだが、おそらく彼女はどこかでイワンの感化を受けているのだろう。実際彼女はイワンに恋して、アリオージャとの婚約を破棄しているのだから。一方恋されたイワンとは言えば、アリオージャが託った彼女の恋文を読みもせず破ってしまったばかりか、「16歳にもならないのに、もう色目を使いやがる」と、棘ある言葉を吐き捨てる。そしてそれを聞いたアリオージャが思わず、相手は子どもだ、兄さんは子どもを侮辱するのかと詰め寄ると、「彼女が子どもであったって、おれは乳母じゃないさ」と、冷笑する。少しあとでは、カテリーナについても、すでに「あんた」言葉で呼び合う深い関係になっているにもかかわらず、「やはり自分のことを乳母だと思って、あやしてもらいたいのさ！」と突き放している。自分は子どもの「乳母」ではない。裏を返せば、「乳母」ではない自分には、「子ども」を世話する責任なんてないということになる。自分は乳母ではない、—この言葉は、子どもの苦しみのみならず、自分以外の人間の苦しみに、イワンがいかに鈍感であるかを物語るものだ。

ミーチャは違う。彼は、苦しむ子どもに冷淡ではいられない。彼には「うわずり」ではない、ほんとうの気遣いがある。なぜ子どもが泣いているのかというミーチャの根源的な問いかけは、子どもが泣かないように、母親が泣かないようにしたいという強い願いと結びついていた。ミーチャの一途な性格、情熱、「カラマーゾフ」のエネルギーがそのはけ口を見出したかのようなのである。じじつ彼は、「カラマーゾフ流の奔放さをあらん限りに発揮して」、餓鬼たちのために何かをしたいと切望している。フョードルやイワンにあってはその使い道がマイナスの方向に限定されていた「カラマーゾフ」の力だが、ミーチャにあってはその力そのものが、子どもの<教え>に舵取りされているために、再生のためのエネルギー供給源となりうるのである。

「餓鬼」の夢は一時的な願望を語っているのではない。2ヵ月後、彼は未決監獄で、面会に来たアリオージャにもう一度この夢の話をするが、ここでは、流刑地に行く目的が「餓鬼」の救済にあると語られる。ただ、こ

ここでいう「餓鬼」は、夢で出てきた、飢えて泣き叫ぶ「餓鬼」よりもさらに大きな意味を含みこんでいる。

「おれは『餓鬼』のために行くんだ。なぜなら誰もがみんなに対して罪があるんだからな。すべての『餓鬼』のためだ。なぜなら大きな子どもと小さな子どもがいるからだ。みんな『餓鬼』なんだ。おれはみんなの代わりに行くんだ。なぜなら誰かがみんなの代わりに行かなくちゃならないからだ²⁴⁾」

ここでは母親の腕の中で泣く子どものイメージの上に、「懲役人」のイメージが加わっている。だから「大きな子ども」という言葉が現れるのだ。無力な、生気を失った多くの「大きな子ども」が救いを求めている。なぜこんな不幸があるのかという問いかけはここではもう影を潜め、誰もがみんなに対して罪があるという考えから、だから自分が救済に行くという新たな決意が生まれる。たとえ懲役に行かなくとも、「大きな子ども」はいたるところにいる。「みんな『餓鬼』なんだ」、—この言葉は、「わしらは彼ら〔人間たち〕が弱く、哀れな子どもでしかないということ、しかし子どもの幸福こそ何よりも甘いものであることを教えてやるのだ」という大審問官の言葉の対極にある。二人はともに、<みんな子どもだ>と言っているのだが、二人の子どものイメージ、子どもに対する態度には天と地ほどの開きがある。一方は子どもに対して強い咎めを感じているのに対し、もう一方は、子どもを軽蔑している。

ドストエフスキイは短編『おかしな男の夢』の中で、病んだ母さんを助けてくれと、往来で「男」に泣いてすがりつく一人の少女を取り上げ、この少女を救うことが、人類を救い、理想の世界実現への一歩となることを示した²⁵⁾。生きる意味が見出せず、いつ自殺をしてもいいと考えていた男の「頭 ум」は、どうせ死ぬ身だ、彼女を救うことも救わないでいるのも同じことだと結論を下したが、実際に追いつがる彼女を振り払ってみると、「心 сердце」の咎めが残った。その夜、彼は自身の進むべき指針を与えてくれることになった、あるべき<理想の世界>を夢に見た。心の咎めが夢

を見させたのである。このように「頭」ではなく、心の咎めに従うことが、「餓鬼」救済への道を切り開くきっかけになるのだ²⁶⁾。

しかし、なぜミーチャはこのように変わることができたのか。「餓鬼」の夢を見たことにはあるいは、超自然的な力（神）も与っているのかもしれないが、もう一つ、ここで触れておかなければならないのは、またしてもあの、アリオージャを再生させたグルーシェンカの大きな力である。

ミーチャがグルーシェンカのもとに最初に訪れたのは、彼女を殴るためであった。グルーシェンカはフョードルの代理人をしていたスネギリョフ二等大尉から、ミーチャを痛い目にあわせてやってくれと頼まれていた。フョードル、スネギリョフ、グルーシェンカはミーチャにとって憎むべき敵であったのだ。しかしグルーシェンカに会うと突如、ミーチャの情欲に火がついた。左足の小指にまでうかがえるという「肉体の曲線美」に彼は魅了され、その後は「カラマーゾフ的」に、野獣のように彼女を追い求めた。しかし彼女と接触するうちに彼の中で何かが変わってくる。その変化はアリオージャの時のように瞬時に訪れるものではなかったが、数ヵ月も経つと、はっきりと分かってくるようになる。ミーチャはその変化を未決監獄の中でアリオージャにこう語っている。

「以前はただもう、あの悪魔的な曲線美に悩まされたただけだったのだが、今は、彼女の魂をそっくり自分の魂の中に受け入れた。そしてその彼女の魂のおかげで[彼女の魂を通して]、おれ自身人間になれたんだ！²⁷⁾」

グルーシェンカの「魂」とは何か。具体的にこれだとは書かれていない。それはグルーシェンカが登場するすべての場面から読者が読みとるものであろうが、すでに触れたアリオージャの出会いの場面からも分かるように、子どものような無邪気さと関係していることは疑いない。ここで補足すべきは、やはり子どもに特徴的である心の<やわらかさ мягкость>である（この子どもの心の特徴に関してはドストエフスキイも『作家の日記』で言及している²⁸⁾）。子どものように心がやわらかであるからこそ、彼女は自身が老商人の「囲い者」として生きてきたことを恥じ、自身のこれま

での行いを卑しいものとして悔いることができるのである。このことをはっきりと示すのが、アリョーシャとラキーチンに語る「一本の葱」をめぐる彼女の告白である。

「一本の葱」とはこんな話である。一昔々、意地の悪い女が住んでいたが、ある日ぼっくり死んでしまった。女は一生の間何一つよいことをしなかったために、悪魔につかまって火の湖に投げ込まれたが、その女の守護天使が、女が昔、一本の葱を乞食に恵んでやったことがあるのを思い出し、神様に申し上げた。すると神様は、火の湖の女に葱をたらし、うまく引きあげられたら天国に行かせてやると言う。湖に葱が垂らされ、女は天使に引っ張りあげられてゆくが、他の罪びとたちがそれを見て、自分も引っ張りあげてもらおうと女にしがみつく。するとこの意地の悪い女はしがみつく罪びとたちを両足で蹴飛ばし、この葱はわたしの葱だよと叫ぶ。とするとたんに葱は切れ、女は火の湖に落ちてしまい、今日まで女はそこで燃えつづけている。

この話は周知のように、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』そっくりで、結末もほぼ同じだ。ただ、「一本の葱」を語るグルーシェンカは芥川の語り手のように客観的、傍観者的立場に身をおいているのではない²⁹⁾。ここで問題になるのは、人間というものの一般のエゴイズムではなく、ほかならぬ自分自身のエゴイズムである。グルーシェンカはアリョーシャに「誠実な姉さん」と呼んでもらって思わずうれしくなり、自分も一本の葱を人にあげたことがあると、傍らにいたラキーチンに誇りたかったのだ。しかし心は揺れる。彼女がその話を語りはじめた時には、そのお話の意味はもう変わっている。語り終わると、彼女は、今度はアリョーシャに、意地の悪い女とはほんとうは自分自身のことで、自分は一生の間に、たった一本の葱を恵んだことがあるだけだと告白する。アリョーシャの「魂」を「立ち直らせ」、またミーチャの「魂」が受け入れたというグルーシェンカの「魂」とは、このように謙遜に満ちた正直でやわらかな、悔いる「魂」だった。もちろん、アリョーシャやミーチャがこのような魂に関わることができたのも、すでに述べたように、彼ら自身が子どもの心をもっていたからにほかならない。

3.

『カラマーゾフの兄弟』では、子どものような心を持った人々だけでなく、実際の子どもたち、イリューシャとコーリヤを中心とする少年たちも登場する。ここでドストエフスキイがなにより強調しているのは、子どもと大人との〈触れ合い〉の重要性である。子どもたちが接触する大人は、スメルジャコフ、ミーチャ、ラキーチン、アリョーシャの4人である。

まず、イリューシャにはスメルジャコフが接触する。スメルジャコフはイリューシャを促し、腹をすかせていたジューチカという犬に、針を入れ込んだパンを食べさせたのだ。ジューチカは痛さのあまり、きんきん悲鳴をあげて、どこかへ行ってしまったが、イリューシャはそのきんきんという声が耳について離れなくなる。彼はジューチカが針を飲み込んで死んでしまったと思った。このジューチカへのあくどいいたずらが原因で、イリューシャは、心服していた年長のコーリヤから君は卑劣漢だと罵倒され、絶交を宣告されることになる。のちに彼は不治の病に罹ってしまうが、ほとんど寝たきりの状態になった彼の心に一番重くのしかかっていたのが、自身が行ったジューチカに対するこの卑劣な仕打ちであった。

ここでの構図はフョードル殺害の時と同じで、スメルジャコフの行為の背後にはイワンの哲学がある。イワンに心服していたスメルジャコフは、「すべてが許される」というイワンの哲学に支えられながらも、自らを一段高いイワンの立場に置き、卑劣な行為に子どもを巻き込むことを楽しんでいた。すべては鎖で繋がっているのだ。誰かに影響された者はまた誰かに影響を与える。

次にイリューシャと接触するのは、ミーチャである。イリューシャの父のスネギリヨフが、イリューシャとその仲間たちの前でミーチャに顎ひげをつかまれ、料理屋から引きずり出されるという出来事が起きた。イリューシャの心には、父親が引きずられ、顎ひげをむしりとられるという無残な「光景」がしっかりと刻みこまれた。彼はただ見ていただけではなく、ミーチャに堪忍してくれと、手に接吻までして許しを乞うた。その日、イリューシャは高熱を出し、始末うわごとを言っていたという。実はイリュ

ーシャはその貧しさゆえに、以前から仲間たちにいじめられていた。年長のコーリヤがイリューシャをかばったために、いじめは一時鳴りをひそめていたが、今はもう、イリューシャはコーリヤに絶交されてしまっている。そのことを知っている仲間たちは、むしりとられた顎ひげを「垢すりへちま」と名づけ、それをイリューシャへのあだ名にしてからかいだした。イリューシャが父親をかばって昂然と向かっていったためもあるだろう、時には袋叩きにしたことさえあったという。「ばらばらの時は天使のようでも、みんながいっしょになると、とりわけ学校では、残酷になることが多うございますな」とはスネギリヨフの言葉だけれども、これもまた、現実の子どもの一面を捉えた真実なのだろう。ドストエフスキイは現実を捻じ曲げはしなかった。ただドストエフスキイにとっては、彼らが変わること、変わりうる可能性があることが何より重要だった。

ミーチャはグルーシェンカのところにも殴りに行ったことがあったが、当時の彼にしてみれば、グルーシェンカ同様、スネギリヨフもまた、自分を破滅させようとしているフョードルの手先であった。スネギリヨフは自分の不利となるようなことに関しては息子には言わずにいるので、少年たちには、事件の内情は皆目わからない。たとえわかったとしても、そのことでいじめが収まるとは思えないし、また、イリューシャの味わった屈辱がそれで減じられることもないだろう。これはいくら正当な理由があろうとも、子どもへの影響というものを考えれば、ミーチャが悪いのである。ゾシマ長老は、幼い子どものそばを通り過ぎる時は、口汚い言葉を吐きながら、不機嫌に通り過ぎないようにしなければならないと警告する。その見苦しい「姿 образ」が「無防備な」子どもの心に残り、それと気づかぬうちに、「悪の種子」を投げ入れることになるかもしれない、そして種子は大きく成長する可能性がある、と彼は言う。この言葉はミーチャの働いた暴力にも当てはまる。ゾシマの言葉を用いて言えば、ミーチャは「行き届いた、行動的な愛」を育てていなかったということになる。

もう一つ、大人が「悪の種子」を撒く例として、ラキーチンのコーリヤに対する接触がある。ラキーチンもまた「すべては許されている」という考えに則って行動しているが、それは彼が他人の感情がほとんど理解でき

ないエゴイストだからで、彼には、イワンが抱えこんでいるような苦悩というものがまったくない。スメルジャコフは、イワンが良心を抑えつけてくれなければ殺人を犯すことができなかつたけれど、ラキーチンにはイワンは必要ない。「すべては許されている」というのは彼自身の素朴な思いなのである³⁰⁾。尊敬もせず、腐臭のことでは悪口すら叩いていた当の長老の伝記を出したり（どうやら彼はアリョーシャが作った伝記資料を使用しているらしい）、フョードル殺しに関する記事を書いたりしているのも、売名と金儲けのためである。この悪魔的俗物ラキーチンが、13歳のコーリャに近づき、その心を弄ぶ。

アリョーシャが「神秘主義者」だの、自分は「矯正不能の社会主義者」だの、キリストは「じつに人道的な人物」で、現代に生きていれば革命家になるだの、自分は「女権論者」じゃないだの—こうした意見はどれも、ラキーチンとの付き合いの中で生まれたものだが、問題は生半可な知識の受け売りにあるのではなく、自身を高所に置き、自分以外のすべてのものを軽んじる態度にある。たとえば、初対面のアリョーシャに対するコーリャの態度はこんな具合だ。「『ぼくは、女性は従属的な存在で、服従しなければならぬことを認めるんです、Les femmes tricotent [女の仕事は編み物だ]、ナポレオンが言った通りです』なぜかコーリャはにやりとした」。男は女より偉いという意見も、ナポレオンの言葉をフランス語で覚えているということもみな、「にやり」のためにある。年齢的にも背伸びをしたい年頃でもあるが、コーリャはラキーチンを通じ、この「にやり」を学んだ。彼が生きていたジューチカを見つけたのに、すぐにイリューシャのところへ連れて行ってやらず隠れて芸を仕込んでいたのも、自分を高く売りつけるためであった。コーリャはイリューシャの病状など心配することもなく、ただ、みんなから大きな尊敬を集めることに執心していたのである。つまりは、みんなの前で「にやり」としたかっただけなのだ。

こうした自分を高所に置く態度から、コーリャは自分に心服するイリューシャを教育しようと考えていた。イリューシャが「気に入っている」という理由で、彼の性格を「鍛え〔=調教し〕、丸くし、人間を作ってやる」

つもりだったのだ。おそらくラキーチンも、コーリヤの性格を鍛え、「人間を作ってやる」つもりだったのだろう。

最後に残ったのは、アリョーシャと少年たちとの触れ合いである。

アリョーシャを最も特徴づけるのは、彼が人間という観念ではなく、人間そのものを愛しているということである。彼はイワンとはちがって、自身の隣人を愛せるのである。彼は誰をも軽蔑しないし、非難もしない。非情な扱いを受けたからといって、恨みを残すことはない。だからイワンが嫌い、ミーチャが嫌ったフョードルに対してさえ、アリョーシャは愛情を抱くことができたし、また相手もアリョーシャにだけは愛情を感じることもできた。「おまえは地上の天使だよ。すっかり聞いて、判断して、赦してくれる」とミーチャは言うが、実際誰もが彼に心の内を打ち明ける。アリョーシャが子どもたちに好かれるのも、彼が一人ひとりの子どもたちに愛情を覚え、彼らを対等の立場で無条件に受け入れるからだ。コーリヤに対しても、「まったくの大人」に対するような口のきき方をした。コーリヤには自分の言動が、アリョーシャの目に滑稽に映るのではないか、軽蔑されはしないかと心配していたが、これも杞憂に終わった。

イリューシャをいじめていた少年たちも、アリョーシャに引き合わされて、一人またひとりと仲直りするようになるが、アリョーシャはそれをあっさりとして、偶然のようにやってのけた。イリューシャの死後、アリョーシャは子どもたちを、イリューシャがその下に埋めてくれと言った「大きな石」のそばに集め、イリューシャを忘れないでいよう、「父親のためにあの子がクラス全体を敵にまわして、勇敢にも一人で立ち上がったことも憶えていよう」と呼びかける。それに応えて少年たちが、「彼は勇敢だった、あいつはいい奴だった！」と言えば、コーリヤも「ああ、ぼくはあの子が大好きだった！」と叫ぶ。ここには以前のコーリヤの傲慢さはもうない。大好きだったイリューシャは人間作りの<材料>ではなく、まさに愛する人間そのものになっている。このコーリヤにおいてははっきりと示されているように、アリョーシャと接触することによって、子どもたちを覆っていた硬い殻は剥がれ落ちてしまう。

ドストエフスキイが、アリョーシャとこの少年たちの〈触れ合い〉の物語において伝えようとしているのは、子どもの性格は「やわらかい」ということだ。子どもはよい方向にも、悪い方向にも変わりうる。たとえ悪い方向に変わっても、悔いて、新しくやり直すことができる。それは子どもが本来持っている力である。そして子どもには「大きな子ども」もいる。「大きな子ども」もまた、「子ども」である限り、やり直すことができるのだ。重要なのは、プラスの触れ合いの連鎖である³¹⁾。

ドストエフスキイは続編も考えていたのだろうが、たとえ全体の一部であれ、一つの物語の締め括りに、子どもたちの話をもってきたことの意味は大きい。この子どもたちの邪気のない「姿」によって、我々読者は未来への希望を教えられる。

「カラマーゾフさん！ ぼくらはみんな、死者の眠りから覚めるって宗教は言いますが、ほんとうでしょうか。甦って、もう一度会えるって、みんなとも、イリュエシユチカとも会えるっていうのは？³²⁾」

このコーリヤの子どもらしさはどうだろう。アリョーシャは、きっとみんな甦りますよと、「半ば笑いながら、半ば感動しながら」答える。すると「そうならば、どれほどすばらしいだろう！」と、コーリヤは「思わず口走った」。これは彼の嫌いな「仔牛的感傷」ではなく、真情である。どうせ会えるもんか、あるいは会えるかどうか分からないと囁く〈知性(頭)〉を、会いたいという〈心〉の願い、感情が圧倒した。この〈子どもの心〉の勝利をこそが、新たな未来を切り開くのだと、ドストエフスキイは語っているのである。コーリヤの言葉はまさに、『カラマーゾフの兄弟』全体を貫く再生のテーマと重なり合うものであった。

注

- 1) それは、スピノザの用語を用いれば、「自己保存の衝動(コナトウス)」でもある。
- 2) Достоевский Ф.М. Полн. соб. соч. в 30 томах. Т.14. Л., 1976. Стр.289. 『カラマーゾフの兄弟』のテキストには、本全集 14 巻、15 巻を用いた。以下、本全集は『ドストエフスキイ 30 巻全集』と略記する。
- 3) 今野一夫訳『エミール』上、岩波文庫、1962 年、101 頁。
- 4) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 25 巻、177-179 頁を参照。
- 5) この「新思想」はラキーチンの行動原理でもある。たとえばラキーチンは、「すべては許されているのか、何をしてもかまわないのか」というミーチャの問いに、こう答えている。「そんなことも知らなかったのか」、「賢い人間は何でもできる。(…) きみなんかは人殺しをしたものの、どじを踏んで牢屋で朽ち果てることになるんだ！」(同上、第 15 巻、29 頁)。
- 6) 村手義治訳、E. ソロヴィヨフ「イワン・カラマーゾフの信仰と神」(U. グラーリニク編、北垣信行監修『ドストエフスキイと現代』ナウカ、1981 年、所収)、152-153 頁。
- 7) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、223 頁。下線部分は原文ではイタリック体。
- 8) 同上、第 24 巻、16 頁。下線は筆者。以下同じ。
- 9) イワンが「権利」という言葉を使うのは、誰にも共通する、一般的な話に限られる。例えば彼は、他人の死を希望する「権利」は誰にでもあると言う。「みんながそんな〔他人の死を望むような〕生き方をしている」のだから、当然の権利だと言うのだ(同上、第 14 巻、131 頁)。本人は意識してはいないかもしれないけれども、<すべてが許されている>という彼の<哲学>にも同じように、「みんな」の生き方が反映されているのだろう。
- 10) 同上、第 22 巻、68 頁。
- 11) 同上。
- 12) 同上、第 14 巻、236 頁。
- 13) 生松敬三訳、E・カッシーラー『ジャン=ジャック・ルソー問題』(みすず書房、1974 年、92-93 頁)を参照。
- 14) 同じ楽園でも、「おかしな男」が夢で見た星の楽園とはまるで違っている。こちらの楽園の住人たちは、「子どものように快活で陽気だった」(『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 25 巻、113 頁)。「これらの人々の言葉や声には、子どものような喜びが響いていた」(同上、112 頁)。彼らはお互い同士について歌を作りあい、「子どものように」ほめあった……。子どもを理想とするか、軽蔑の対象とするか、その差が楽園の内実の違いを語っている。
- 15) 同上、第 14 巻、238 頁を参照。「彼〔大審問官〕は、今や賢い悪魔、恐ろしい死と破壊の悪魔の指図 указание に従ってすすまなければならないことを知ようになる」と、イワンはアリョーシャに語る。「指図」という言葉を介して、子どもと悪魔が正反対の<源>として対立させられている点に注目したい。
- ゴロソフケルはこの「悪魔」を大きく取り上げ、「作者の側のプランから言えば、カラマーゾフ老人殺害の犯人は悪魔であって、スメルジャコフではない」と述べているが、より正確に言えば、イワンとスメルジャコフが「悪魔の指図」に従って殺害を企て、スメルジャコフがそれを実行したのである(ゴロソフケル、木下豊房訳『ドストエフスキイとカント—『カラマーゾフの兄弟』を読む』みすず書房、1988 年、39 頁を参照)。
- 16) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、137 頁。

- 17) 同上、318頁。
- 18) 同上、第22巻、68頁。
- 19) «надрыв»という語に関しては、江川卓の詳細な解説を参照されたい(『謎解き『カラマーゾフの兄弟』新潮選書、1991年、134-136頁)。「うわずり」という訳語は同書で用いられている江川訳である。他にもこの語には「破裂」(米川正夫訳)や「病的な興奮」(原卓也訳)、「意地づく」(江川卓訳)など、多くの訳語が考案されてきたが、最も新しい亀山郁夫訳では「錯乱」という語が当てられている。
- 20) 『ドストエフスキ 30巻全集』第14巻、372頁。
- 21) 同上、456頁。
- 22) 例えば、レヴィナスは「倫理的抵抗を示す顔」について次のように語っている。
「この倫理的抵抗が私のさまざまな権能を麻痺させ、無防備な眼の奥底から、顔の裸形と悲惨とにおいて堅固で絶対的なものとしてたちあらわれる」(熊野純彦訳『全体性と無限』下、岩波文庫、2006年、43頁)。
レヴィナスは幾度も、「人はほんとうにみな、万物に対して、万人に対して罪があるんですよ。(…) ことによると、私はこの世の他の誰よりも罪を負っているのではないか」(『ドストエフスキ 30巻全集』第14巻、270頁)という、ゾシマの兄の言葉を引用している(例えば、合田正人訳『外の主体』みすず書房、1997年、77頁を参照)。ゾシマもミーチャも、これに近い言葉を吐く(「誰もがみんなに対して罪がある」)。ミーチャがこのような考えに到ったのは、まさに「餓鬼」の夢を見たからにほかならない。一泣き叫ぶ赤ん坊の姿は「顔」の概念に直結しているのである。
- 23) 『ドストエフスキ 30巻全集』第14巻、456頁。
- 24) 同上、第15巻、31頁。
- 25) 「餓鬼 дитё」は単数である。『おかしな男の夢』でも、『カラマーゾフの兄弟』でも、全人類は<一人の子ども>に置き換えられているのだ。
- 26) カリヤーキンは、「みんな餓鬼なんだ」というミーチャの言葉をドストエフスキのもっとも短い「アフォリズム」であるとし、「苦心に苦心を重ねてきたもので、恐ろしいと同時にもっとも希望に満ちたものである」と評しているが、同感である(См.: Карякин Ю. Достоевский и канун XXI века. М., 1989. Стр.114.)。その評価は、ミーチャが懲役に行こうとアメリカに逃亡しようと、変わるものではないだろう。「餓鬼」は何も懲役人だけに限定されないし、なによりここでの問題は「餓鬼」に対する態度にあるからだ。ただ、のちに述べるように、「行動的な愛」に関して言えば、ミーチャには足りないところがある。
- 27) 『ドストエフスキ 30巻全集』第15巻、33頁。
- 28) 同上、第25巻、187頁。
- 29) 『蜘蛛の糸』では、犍陀多の我執によって断ち切れた「きらきら細く光」る糸と御釈迦様の「悲しそうな御顔」が印象深く示されているだけで、語り手自身の評価はまったく示されていない。そこには芥川の、認識者としての「優越の精神」が感じられる(この「優越の精神」については、駒沢喜美『芥川龍之介の世界』法政大学出版社、1972年、53-54頁を参照)。
- 30) 注5を参照。
- 31) アリョーシャ自身はおそらく、子どもたちを愛することをゾシマとの触れ合いから学んだ(もちろん、ゾシマ以外の者からも学んだであろうが)。一方、ゾシマに子どもを愛することを「教えた」のは、40年前に彼といっしょに諸国を遍歴したアンフィーム神父である。神父は施された小銭で、子どもたちに飴や糖蜜菓子を買

い与えていた。この神父は、子どもたちの傍らを通り過ぎる時には、いつも「心のおののき」を覚えていたという。もちろんゾシマは、『聖書』のキリストの「姿」からも子どもを愛することを学んでいるだろう。連鎖は至るところにある。

³²⁾ 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 15 卷、197 頁。